著作権研究（連載 53）

スマホが変えた「リアル」の定義と肖像権意識

～「素顔」を撮られたくない若者たち～

佐々木広人（株式会社キュービック　エディトリアルデスク ゼネラルマネージャー／元『アサヒカメラ』編集長）

写真がデジタル化され、一般の人たちの写真に対する意識が大きく変容しています。著作権法の解釈や裁判の判例などは過去からの一貫性を保っているけれど、人々の権利意識は大きく変化しています。「著作権や肖像権に対する意識には世代間で大きなギャップがあり、写真を撮る人たちがそれに気づいていないこともトラブルの原因となっている」と佐々木広人氏は指摘します。連載２回目は、スマホ世代の若者の肖像権意識について解説いただきます。

（著作権委員会）

スナップ撮影と肖像権の問題を語る際、よく引き合いに出されると言えば、「写真の記録性」あるいは「リアリティ」「リアリズム」。写真愛好家にはおなじみのフレーズだ。もちろん、写真に造詣が深い読者のみなさんに、「カメラは見たままを写してくれる」などと素人みたいに言うつもりはない。事実、機材任せではどうにもならないからこそ、これまで幾多の写真家が「リアリズム」を追求し、感性と知恵を働かせてきたことも存じ上げているつもりだ。

だが、最近、この「リアル」という言葉の定義を疑う必要があり、その定義の違いがSNS時代の肖像権問題に影を落としていると思うのだ。「佐々木は何を書いているのだ？」と思われる方もいるかもしれないがどうか話を聞いていただきたい。

●コロナ禍で加速した「素顔隠し」

『精選版 日本国語大辞典』（小学館）によると、リアルとは＜現実のこと。 また、現実的であるさま。 ありのままであるさま＞とのこと。当たり前である。

ところが、学生や会社員といった普通の若者たちの中には、素顔やありのままではない自分の姿を「リアル」と考えて憚らない人たちもいるのだ。

たとえば自分の分身となるキャラクターの「アバター」（下の写真参照）。SNSやオンライン会議で自分の顔写真の代わりに使用する人も増えており、ご存知の方も多いだろう。

ただし、これを従来のイラストや似顔絵と同じように捉えてはいけない。コロナ禍で大ヒットしたゲーム「あつまれ どうぶつの森」では、このアバターどうしがオンライン上でコミュニケーションを取ったことが「お籠り生活」の象徴としてニュース番組などで報じられた。報道機関の取材に対して大学教授がアバターを介して応じたことも話題になった。実は私もこの２年間、大学でオンラインの講義を行っているが、アバターは知っていても実際の顔を見たことがない学生が何人かいる。

筆者がFacebookで作ったアバター。髪型や肌の色などパーツを選んで作るのが一般的だ。

極め付けは、今後広がるとみられる仮想空間の「メタバース」だろう。ここではアバターどうしでなければビジネスやエンタメを楽しめない分「アバター＝私」の認識が強まることはもはや明らかだ。

こうなると、そう遠くない将来に「対外的に見せる顔」を「アバター」に置き換える人が増えていくと予想される。つまり、肖像権の対象とされる現実の顔は「対外的に見せる顔」ではないという認識が、これまで以上に広まっていくと考えられるのだ。「対外的なリアル」を意識するあまり、本来の素顔は「見られたくないもの」から「見せる対象外」へと意識が変化していくだろう。

こう書くと、「仮想空間と現実は別物。その懸念は世迷言だ」という批判を受けそうだが、私自身はそう思っていない。実はSNSの世界を中心に、「対外的に見せる顔」は「現実の素顔」とはすでに別物になっているからだ。

●「リアル」の定義は既に変質

「インスタ映え」が流行語になった2010年代、写真を「盛る」「デコる」といった行為が話題を呼んだ。

たとえばポートレート写真。これまでも撮影後に色味や輝度、コントラストなどを調整することはあったが、今では目や肌の形や質感を変えたり、「本来ないもの」をトッピングしたりする手法が、スマートフォン利用者の間では当たり前になった。リアリズムを追求する写真家にとっては、なかなか理解しがたい手法かもしれない。

だが、スマートフォン利用者（今や世の中の写真愛好家の大多数と言ってもいいかもしれない）は、それらの手法を当然のように受け入れている分、むしろ当たり前だと認識している若者も多い。そしてその「当たり前」が若

者たちにとっての「リアル」になっていると言っても過言ではない。

人物写真で「盛る」「デコる」という行為は、今や履歴書の写真でも見られるようになった。履歴書の写真といえば、かつては写真館、あるいは街角の証明写真ボックスで撮影されるものだったが、今はスマートフォンで自撮りして、写真加工アプリを使って「調整」して添付される時代だ。私もこれまで新卒・中途採用の面接に何度も立ち会ってきたが、本人と会って「履歴書の写真と違う」と思った経験は一度や二度ではない。そのあたりの感覚について、以前、学生たちにたずねたところ、

「自撮りとアプリを使えばおカネがかからないから」
「写真をいじるのはむしろ普通」

と口をそろえた。

つまり、自分自身の姿をカメラに任せてありのままに撮ってもらうという感覚が希薄になり、写真を好きなように加工するのがスタンダードになったのだ。

●コスプレ撮影と通底する問題

そこで私が思い出したのは、前回の拙稿でも触れた『アサヒカメラ』の「コスプレイヤー写真」の話だった。重複になるが、エピソードを再掲したい。

同誌 2016 年 10 月号でのこと。広い公園の歩道に面した場所で、カツラを被ろうとする男性やメイクに勤しむ女性らを撮影したスナップ写真が月例コンテストの入賞作品として掲載された。まさにコスプレイヤーが「変身」する前の様子を捉えたものだった。ところが、作品を見た読者が「こんなシーンは撮られたくないな」と Twitter で漏らした感想が拡散、SNS は批判であふれ返った。この一件がきっかけで、『アサヒカメラ』では写真の肖像権の特集が組まれるようになった――という話である。

ここで注目したいのは「こんなシーンは撮られたくないな」という言葉だ。発言主のツイートは早々と削除されたので、今となっては心境を深掘りすることができない。だが、呼応した人たちの批判ツイートを読むと、ある意識が浮かび上がってくる。それは「自分が納得する姿でないと撮影されたくない」という強い意思。コスプレイヤーの場合、「変身後の姿」が「表現したい自分」であり、「外にさらしてもいい自分」であり、人によっては「外向けのリアル」のようなものなのだ。これはおそらく、自分の写真を「盛る」「デコる」ことと似た意識・感覚ではないか。

コスプレの会場であれば「変身前」を撮影しないなどの「暗黙のルール」に従えば無用なトラブルは避けられるだろう。だが、ストリートスナップはそう単純ではない。

知らぬ間に自分の顔が撮影され、作品として発表されることに対しては、既に SNS 上などで反発の声が上がっている。もっとも、肖像権や刑事・民事に関して誤った知識に基づいた声が多く、それが議論を歪ませていることについては、前回の拙稿でも指摘したとおりだ。

とはいえ、今や「盛る」「デコる」写真を当然視する人たちが、普通に街を歩いている時代。そこにこれまで同様、レンズを向けて撮影するとなれば、撮影者が非難を受けるリスクは高まるばかりだろう。「外向けのリアル」を準備せず街を闊歩する若者にとって、それは不快であり、恐怖であり、大袈裟な言い方をすれば、アイデンティティが揺らいでしまうからだ。

●「時代の記録」と言うならば…

だからといって、私は従来のストリートスナップ手法を批判するつもりはない。前回の拙稿でも「必要なのは撮影者の知識と感性のアップデート」と書いたとおり、被写体となり得る人たちの「リアル」を意識することが必要だと考えている。ただ、漫然と街にレンズを向けるのではなく、撮影者と被写体となり得る人たちとの「リアル」の差異を理解して撮るべきではないだろうか。

もしスナップ撮影を「時代の記録」と言うのなら、従来の手法に固執することなく、時代性の反映を最優先すべきだ。もちろん「リアルに対する意識」は簡単に表出するものではないかもしれない。だが、写り込む人物の姿や街角の様子、はたまた電飾看板やショーウィンドウにそれらの「破片」を見出せるかもしれない。目に見えないからこそ、何かが代弁することもあり得る。

＜心が変われば行動が変わる。行動が変われば習慣が変わる。習慣が変われば人格が変わる。人格が変われば運命が変わる＞

これはアメリカの哲学者で心理学者のウイリアム・ジェイムズの言葉だ。後半の二つの文章は余計だが、人々の意識が変わる時は何らかの変化が表出するもの。ピンチと捉えず、時代を捉えるチャンスだと思いたい。

佐々木広人（ささき・ひろと）
株式会社キュービック　エディトリアルデスク・ゼネラルマネージャー／株式会社アーク・コミュニケーションズ取締役／専修大学講師／一橋大学卒。リクルートを経て朝日新聞社に入社。『週刊朝日』副編集長、『アサヒカメラ』編集長、「AERA dot.」編集長、雑誌本部長などを務め、2021 年 7 月に退社。『アサヒカメラ』の肖像権や著作権の特集が話題に。2012 年新語・流行語大賞大賞トップテンを受賞した「終活」の発案者でもある。